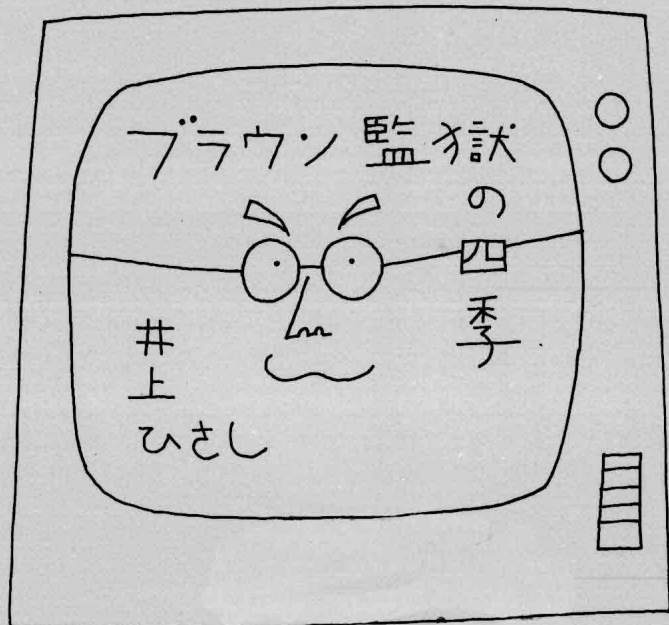


ブラウン監獄の四季

井上ひさし





ブラウン監獄の四季

第1刷 昭和52年2月17日発行

著者 井上ひさし

発行所 株式会社 講談社・発行者 野間省一

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111(大代表) 振替 東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

© 1977 HISASHI INOUE Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

定価はカバーに表示してあります

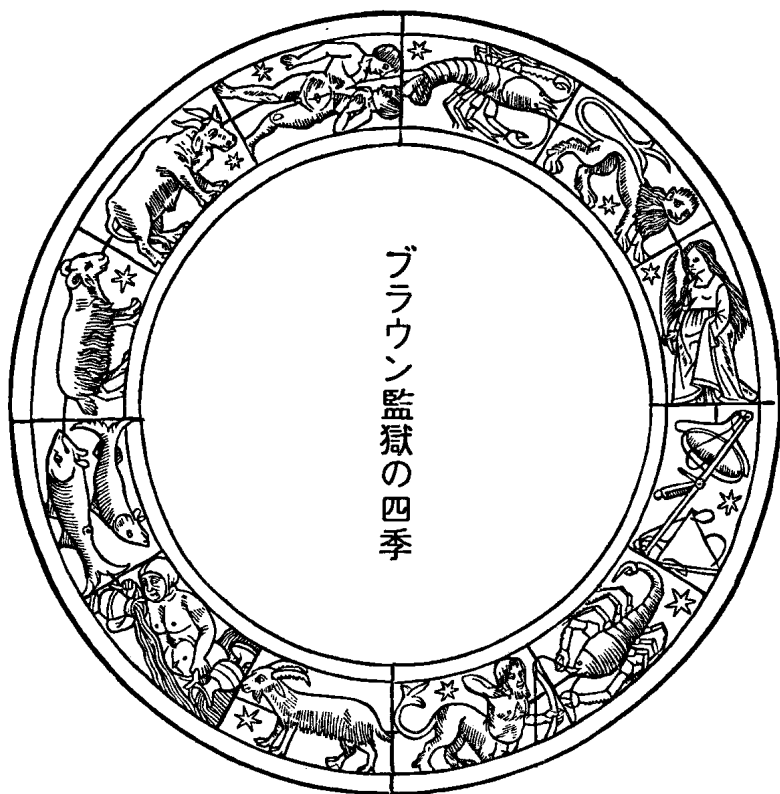
(文2)

ブラウン監獄の四季
目次

監獄入りを果すまで	6
紅白のタイムマシンに乗って	17
改名は三文の得	28
原稿遅延常習者の告白	40
下痢と脂汗の日々	53
わが人生の時刻表	64
NHKに下宿したはなし	76
喫茶店学	89
書前・書中・書後	100
ある悪徳ライターの反省	112

一盗一窃のひけめ……………	123
赤ん坊を背負った作曲家……………	134
ザ・ドーナッツ、考査室と戦う……………	146
”……………	157
テレビポルノ批判の再批判……………	169
怪電話の怪婦人に与う……………	180
巷談俗説による日本放送協会論……………	190
”……………	200
”……………	209

装 幀
和 田
誠



監獄入りを果すまで

二三歳から三七歳の今日までテレビの仕事で細々と露命をつないできた……という言い方はじつはすこしおかしいのかもしれない。三人の子どもは育ち盛りのせいもあってへ細々とどころかへ盛大に＼ものを喰っており、これはじつにテレビのお蔭であるし、また、読みたい本や観たい映画があっても、懐具合によっては万引するか無料入場の手を考案するか、でなければ心淋しく諦めるかしなければならなかったかつてのある時代とちがい、いまは高価な古本を除いてはたいていは手に入り、観たければ封切館にも気楽に入れるわけだが、これもテレビの仕事をさせてもらっているからであるし、その他、数え上げれば際限はないけれども、粗末ながら夜露はしのげる建売住宅を手に入れることができたのも、飲めないとは言いながらそれでも時折酒を舐めることができるのも、一日に八〇本の煙草を紫の烟にできるのも、これすべてテレビで仕事をさせて貰っているからで、いわばテレビは命の親、われら親子の大恩人、とテレビ受像機の前に坐るたびに心の中で手を合せてはいる。また、テレビ局の放送塔の林立する都心は、ぼくの住む市川からは西にあたり、したがって昼寝や仮寝するときでも決して西方浄土に足に向けて横になつてはならぬと、自らも戒め、妻子にも事あるたびにそう言い聞かせているのだが、それでもテ

レビの仕事はぼくには「細々と露命をつなぐ賃仕事」という感じがつきまよって離れない。それどころか、テレビの世界からすこしずつ足を洗い、縁遠になったいま、改めてあのブラウン管の世界を振り返って眺めると、なんとなくあれは「ブラウン監獄」という名の刑務所ではなかったのかという気さえもするのだ。

そんなわけで、この駄文の通し題名をブラウン管をもじって「ブラウン監獄の四季」としたのだが、しかし、いくらなんでもわが大恩人を監獄にしてみようのはあんまり非礼というもので、通し題名を考えるにあたっては、たとえば、札幌冬季五輪やミュンヘン五輪でNHKアナウンサーが「ニッポン！ ニッポン！」と矢鱈に喚いていたから「ブラウン喚のなんとか」がよからうかとか、ブラウン管世界の勢力、そしてその影響はいまや強大であるから「ブラウン汗のなんとか」と成吉思汗になぞらえる方法はないかとか、その他列挙すれば、悪寒の走るような番組が横行しているから「ブラウン寒」、ブラウン管世界は不景気で臨終が近いという噂をもとに「ブラウン棺」、遺憾な番組が多いから「ブラウン憾」、手抜き智恵抜き金抜きの簡単な作り方をするゆえに「ブラウン簡」、などと文句を言いながらも閑さえあれば見てしまうものであるから「ブラウン閑」、欠陥番組の多い折から「ブラウン陥」、それでも結構楽しいから「ブラウン歓」、よろしくお願いしますと甘ったれ声の歌手がしばしば姿をあらわすから「ブラウン甘」、質物の才能が時めく世界だから、「ブラウン質」、愛欲場面もしげしげと登場するから「ブラウン姦」、それにしてもみんなよく頑張りが聞いているから「ブラウン敢」、だからといってこっちの癩癩玉を破裂させるような下らない番組がやはり多いところから「ブラウン癩」、ごく平凡に「ブラウン館」

擬人法で「ブラウン漢」、それから「ブラウン函」「ブラウン疳^{かん}」「ブラウン患」、そのうち面倒臭くなって「ブラウン鑑」「ブラウン艦」「ブラウン癌」……と愚にもつかぬ命名法を試みたのだが、この中ではやはり「ブラウン監獄」がいちばんましであるようで、非礼は万々承知の上でそう決めた。

さて、ぼくが自ら望んでこの「ブラウン監獄」の囚人になったのは冒頭に記したように昭和三年、二三歳のときだったが、それ以前、テレビについてどういう感想を抱いていたかといえ、それは第一期は無関心、第二期は敵意、第三期は憧憬と、三つに分けることができるだろう。

第一期というのは、日本テレビ開局の昭和二八年から昭和三一年までで、この時期の殆どをぼくは岩手県の太平洋沿岸の、山の中の国立結核療養所の事務雇として過していたのでテレビとは全くの無関係、ときおり中央からテレビについての噂が流れてきても、そのような文明の一大利器が自分たちの住む岩手の山の中まで及んでくるのはずいぶんと先のことだろうと考えて、ヘエともホウとも思わなかった。なにしろ、その山の中では、零細な農民たちは手づかみで人糞を撒^まいていた。肥柄杓^{こやしびやく}も一応文明の利器に数えるなら、その肥柄杓程度の文明さえも未普及の山の中だったのだ。

そのころのぼくは映画に夢中で、毎朝、自転車^{てん}を漕ぎ山道を登って療養所へ行き、看護婦さんの俸給の計算をし、彼女たちの間を走り廻って汚れた白衣や看護帽を集め、また洗濯済みのものを配り、看護婦宿舎のこわれた塀を修繕し、窓ガラスが破損していれば新しいの取り換え、宿舎

周囲の溝を掃除し（なにしろ、ひと月六〇〇〇円の給料で看護婦諸姉の下男役をつとめるのがぼくの仕事だったのだ）、五時になると疾風の如く自転車飛ばして山を駆け下り、町にかかっている映画を虱（しらみ）つぶしに観て歩くのを日課にしていた。時はまさに映画の黄金時代、人口八万ほどのその町に七軒もの映画常設館があり、どこもいつも満員だった。ぼくは、月曜はA館、火曜はB座、水曜はCホール……という具合にスケジュールを決め、それを勤勉に消化した。当時の雑誌帖に観た映画の題名が一本残らず書きつけてあるが、数えてみると、二八年の秋から翌二九年の夏までの最初の一年間に、二五八本、気狂いじみた映画少年ないしは青年ぶりである。もっとも続く第二年はぐんと減って四六、七本。これは映画熱が醒めたのではなく、受験勉強に時間の大半をとられるようになったせいである。

そのころのぼくの身分は国家公務員三級四号本俸五七〇〇円也という身分と、上智大学独文科一年在学中という身分の二本立て。つまり、学資が続かなくなったので学校に休学届を出して離京し、山の中の療養所で資金稼ぎをしていたわけだが、金が貯まるにつれて、大人しく元の大学へ復するのが莫（ば）迦（か）らしく思えてきたのである。読者の中に上智大学にゆかりの方がおいでになると悪いのだが、もっとまじな大学が他にもあるはずだと考え、日頃から看護婦さんにこき使われていたせいもあって、これら看護婦諸姉を見返してやるために医科大学に進み医師になろうと決心した。俸給の計算を一円違えても「おまえが着服したんだろう」といわんばかりのすさまじい権幕で事務室のぼくの所へ怒鳴り込んでくる看護婦さんが、独身の医師の前に出ると、ころっと急変してごろごろ喉を鳴し、煮るなり焼くなりひん剝（む）くなりなりセンセの好きにして頂戴と猫なで声を

出している……ように当時のぼくには思われた。減私奉公をモットーに甲斐々々しく下男役を勤めるぼくにはアメ玉半個しゃぶらせてくれたことがないのに、医務室の青年医師の机上是看護婦諸姉の持ちこむ貢物で、果物屋や菓子屋の出店^{でみせ}みたいではないか、と当時のぼくはひとり腹を立てていた。いま考えてみると、これはずいぶん身勝手なひがみである。汗水たらして働いたことに対する報酬が規定より一円でも少なかったらだれだって怒るのは当然だし、アルバイト学生よりれっきとしたお医者さんを頼もしく思うのも当たり前なら、また看護婦さんの下男役を勤めた働き分には国がちゃんと報酬を払ってくれていたわけで、その上さらに看護婦さんに対し、たとえ半個といえどアメ玉を要求するのはこれはたかり行為というべきだ。だが当時のぼくにはこの簡単な理屈^{だま}さえもわからず、俺も一丁お医者になって、日本中の看護婦さんを片っぱしからひとり残らず欺^{だま}してやろう、とそんなことを半分ぐらいは本気で考えて、第一志望は東北大学医学部、第二志望は、これまた読者の中に岩手医大ゆかりの方がおられたら悪いのだが、岩手医大と決め、高校時代の教科書を引っ張り出して塵^{ちり}を払い、鉢巻用の木綿手拭を五本も購入したのだ。た。

病苦に悩む人たちのためにすこしでも力になってあげたい、そのために医師になりたい、という崇高な動機で医学部突破の目標を掲げたのなら、神はおそらく御加護を下し給うたことだろう。苦節何年、あるいは十何年かかったかわからぬが、ぼくはどこかの医学部に合格できたかもしれない。しかし、ぼくの動機は看護婦さんにもてたいという卑しい他愛のないものだったから、神も呆れられたとみえて何の御加護もお下しにならなかった。国語や英語は独習でもなんとかや

れたが、これが物理・化学・数学となると、高校時代、教師に何遍聞いても判らなかつたぐらいで、独習となると尚更雲を掴むより心許ない有様。昭和三〇年には東北大、三一年には岩手医大と、二回挑戦したが結果は惨敗、これでは看護婦千人斬りどころか一生看護婦さんの下男だ、もう逃げ出すにしくはない、そう考えて医学部進学の看板をこっそり外し、上智大学へ復学したところまでが第一期。お読みいただいてわかるように、この頃のぼくの脳中にあったのは「お医者になって看護婦の上に立とう」の一六字だけ、テレビの三字はそのかけらもなかった。

昭和三十一年の春に再上京して、その秋浅草のストリップ小屋で働き始めるまでの半年間も、テレビについては無関心で、ぼくの関心は、もっぱら新宿の花園町や新宿高校周辺の暗がりあたりであり、上京したときは、二年半かかって稼いだ金ですくなくとも二年は喰いつなぐ計画だったのに、足繁な新宿の赤い灯青い灯通いで、わずか三ヵ月で虎の子が失踪してしまい、これにはすこしばかりうろたえた。そしてまたアルバイトに憂き身をやつすことになり、その五番目か六番目の働き口がストリップ小屋の進行係だったのだが、この進行係時代は心の底からテレビを憎んだ。

進行係の職務は、文字面からおわかりいただけるように、舞台を大過なく進行させるのが第一、性具にたとえていえば「助け舟」、いわば添え木のようなもので、本体さえしゃきつとしていれば、すべては自然に進行するから楽なものだが、本体にさしつかえが出てくると、大騒ぎになる。たとえばストリップが休みをとったとする。彼女がソロの景を持たぬ、その他大勢な話は簡単だ。ただ、放っておけばいい。しかし、ソロの景を持つ踊子の場合、香盤表を組み

直さなくてはならなくなる。もっと詳しく言うと、ある踊子が七景でソロダンスを踊ることになつていたとしよう。彼女が休演した場合、七景をカットしただけでは話が済まない。別の踊子が七景をはさんで、六景でだれかひとりデュエットを、八景でだれか三人でカルテットを踊つていたとすると、この踊子は七景があつたからこそ衣裳を替える時間があつたのに、七景が飛ぶと、六景と八景がつながつてしまい、忍法の使い手でもない限り、衣裳替えが不可能になつてしまうのだ。そこで、六景か八景のどちらかを七景と共にカットする必要があるのだが、これがじつは難しい。六景のデュエットを切ればデュエットの相方がふくれて文句を言う。八景をカットしようとするれば他の三人が異口同音「ああ、進行さん、あたしたちつてその程度の踊子だったのね」と口と臍を曲げる。ぼくは六景と八景の間で板ばさみになつて進退きわまつてしまふ。よほどの決断力と押しがないとこういつた場合はうまくまとまらず、踊子たちに恨みを残すことになる。かといって断乎たる決断力でばさばさ景を切つて行くのも考えものだ。全二四景正味一時間半のショウが全一六景正味五〇分などとなつてしまつたら、表の支配人から雷が落ちる。だからぼくは進行係時代、毎朝毎晩、どうぞ踊子全員が健康で息災でありますようにと、彼女たちのためにではなく、自分のために一心に祈つたものである。もっとも踊子の休演などは、男性コメディアンの欠場と較べればまだ救いがある。コメディアンの欠場ばかりはどうにもならぬ。彼等の出演するドタバタ笑劇あるいは人情劇もしくは猥雑劇は、ショウのように、ソロだのデュエットだのカルテットだのと、景ごとに型式や人数や出演者がはっきりと決まっているわけではない。芝居であるから、全員の役柄は、四ツ編み紐か五ツ編み紐の如くからみ合いねじれ合い渾

然^{ぜん}一体、誰が抜けても芝居が成り立たなくなってしまう。

ぼくが働いていた頃のその小屋には、病^いい癒えて復歸したばかりの渥美清氏をはじめ、谷幹一氏、長門勇氏、和田平助氏など、いずれ後にはひと花もふた花も咲かせる役者諸公が互いに切磋^{せつさ}琢磨^{たくま}しており、したがってその舞台はそれこそ抱腹絶倒珍無類なものだったが、そのころもうすでにテレビが目をつけていて、ある日は渥美氏を、また別の日は谷氏をと、さっさと拉致^{らち}していつてしまう。上記の俳優たちはたいいてい劇の主人公か準主人公、その大切な人が半日か一日、さっと居なくなってしまうから進行係は苦勞する。芝居の筋立てをカットするわけには行かぬから、役を動かす。たとえば、渥美氏がテレビ出演のために休演すると、渥美氏の役を谷氏が、谷氏の役を長門氏が、長門氏の役を和田氏が、そして和田氏の役を研究生筆頭が、というようにひとつずつずらして行く。するとどうなるか。当然どん尻までずらして行くと、ひとり役者が足りなくなる。これを埋めるのがじつは進行係の仕事なのである。持ち合せているのは食い気と色ッ気だけで芝居ッ気皆無のぼくも、こんなわけで何度か余儀なく舞台に立つ破目になったのだが、おっかなびっくりに仕種をし、覚束^{おぼつか}なく台詞^{セリフ}を喋^{しゃべ}りながら、ぼくは心の中で、テレビに対してありとあらゆる罵詈雑言^{ばりざごん}を浴^{あび}せかけていたものだ。顔がよくて演技も素人にしては結構いけて声でもびんびん通って「進行さん、なかなかやるじゃない。進行なんかよして、役者におんなさ^さいよ」などと踊子に言われでもしたら、かえってテレビに感謝したかもしれないが、実情は全く逆で、顔は出ッ齒氣味で品がなく、さりとてコメディアンとして有力な武器になるほどぶっこわれてもいず要するに中途半端な顔、演技どころか舞台に出ると、腕一本足一本を動かすのさえ意

のままには参らず、声は通らずしたがって「なにを言ってるのだ。聞えないぞ」と客は喚き散らす。それでこのような恥しい目に逢わせる機会を作ったテレビを憎んだわけだった。

浅草のストリップ小屋をやめてからは、四谷駅前にある、小さな出版社の倉庫番をした。夕方の六時から翌朝の八時まで、ただぼやーっとしているだけでよいという結構な働き口だった。給料は月五〇〇〇円で、五〇〇〇円あればなんとか食べることだけはできたから、ぼくは毎晩、一所懸命ぼやーっとしていた。しかし、一所懸命ぼやーっとしているというのはこれで案外難しく、そのうち倉庫番そっちのけでラジオを聞き、やがてこっそり抜け出し喫茶店へ行き、そのうちに図々しくも新宿あたりへ心やさしい娼婦とめぐり逢いたくて出かけてみたり、なかなかぼやーっとはしていなくなっていく。娼婦に逢うには金が必要だった。倉庫番をしながらその上にまた金を稼ぐ方策はないものか。そう考えているうちに思いついたのが、各種脚本の懸賞募集である。当時はどこの民放局も開局して三年目か五年目ぐらいで、記念行事のひとつとして、一般からテレビやラジオの脚本を募集していた。そこである日、国会図書館へ出向き、一日つぶして各地の新聞の最近一ヵ月分を一通りすべてをめぐり、北は北海道放送から南はラジオ鹿兒島まで、すべての放送局の脚本募集要項をノートに写し取り、倉庫に帰ると、大きな紙に締切日順に書きだし、片っぱしから応募して行った。いま、考えてわれながら偉かったと思うのは決して締切に遅れなかったことだ。

この脚本懸賞応募業は二年近く続いたが、この期間に応募した回数は一四五回。うち入選が一八回。佳作が三九回。あとは落選。稼いだ賞金が三四万六〇〇〇円。(当時の成績表がとってあ